

1. 発表学会について

筆者は、2016年7月13日～17日にイギリス、カンタベリーで開催された第17回国際バロック音楽学会（The 17th Biennial International Conference on Baroque Music）に参加し、研究発表を行った。本学会は、2年に一度開催される国際学会で、発表はすべて英語で行われる。今回はカンタベリーのクライストチャーチ大学がホストとなり、約150の個人発表とラウンドテーブルが開催された。各セッションのテーマは「フランス」や「イングランド」といった、ある地域の音楽を広く扱うものから、「17世紀の音楽ビジネスにおける海賊行為、保護制度、大衆化」という具体的なものまで、多岐にわたる。参加者は英語圏を中心に、欧米各国から集まっていた。アジアからの参加は非常に珍しく、日本人は筆者を含め2名で、その他、トルコ、香港、台湾からの参加者がいた。

2. 発表要旨

今回は「販売カタログが明らかにするもの——アムステルダムの楽譜出版者エティエンヌ・ロジェによる器楽曲の分類と様式の判別（1696-1716）What reveal the sale catalogs: the classification of instrumental pieces and the stylistic judgement by the music publisher in Amsterdam Estienne Roger (1696 – 1716)」というタイトルで発表を行った。

本発表は、17世紀末～18世紀初頭にアムステルダムで活動した楽譜出版者エティエンヌ・ロジェ（1665/66-1722）が、販売カタログをどのように活用したのかを明らかにすることを目的とする。ロジェは一般にコレリやヴィヴァルディなどのイタリア音楽の出版を行った人物として知られ、また楽譜出版史においては、彫版印刷技術を用いて国際的な楽譜出版を行った最初期の人物としても位置付けられている。しかし、ロジェの楽譜出版の国際性が何に起因し、どのように維持されていたのかは、考察の対象とならなかった。

そこで本発表では、カタログがロジェの国際的な楽譜出版の鍵となっていたという観点から、カタログ上で出版物がどのように分類されたのかを明らかにした。このような視点は、カタログを楽譜の書誌情報を知らせるリストとしてだけでなく、それを編纂した人物の意図をあらわす史料として見なすものであり、楽譜出版史研究の新たな手法となり得る。

1696年～1716年に刊行された45のロジェの販売カタログを精査した結果、1701年以降、器楽曲が「フランス風」、「イギリス風およびイタリア風」という名称で分類されることが分かった。このような分類は作曲家の出身国や地域ではなく曲のジャンルと対応しており、「フランス風」はトリオや組曲、エールなど、「イギリス風およびイタリア風」はソナタとコントルダンスによって構成されていた。また、出版点数の増加に伴って分類

が変化することも分かった。1708年にはリコーダー用の曲が「イギリス風」のものとして扱われるが、1712年には「イギリス風」のグループがなくなり、コントルダンスは「フランス風」、ソナタは「イタリア風」のグループへと再編成された。ロジェの楽譜の主な消費地がロンドンであったことから、1708年の「イギリス風」グループの独立はロンドンの顧客に配慮したものと考えられるが、結局「フランス風」と「イタリア風」の二本立てにした方が楽譜の売れ行きが良かったものと思われる。

本発表ではその他に、複数のグループに重複して掲載されている楽譜に注目し、その音楽的特徴からロジェがなぜ重複を行ったのかを考察した。その結果、ステッファーニ、ペツ、ド・ラ・バール、ボノンチーニ、ボンポルティ、シックハルト、ミュラーの9点の楽譜が「フランス風」と「イタリア風」に共通して見られ、それらはイタリア音楽とフランス音楽両方の特徴を持つものであることが浮かび上がった。ロジェはこれらの楽譜を、「フランス風」においては「組曲」、「イタリア風」においては「ソナタ」と呼び分けながら販売していたのである。このような手法から、重複は品ぞろえを多く見せ、一つの楽譜を効果的に販売するためのアイデアだったと考えられる。ただし、重複した楽譜の内容から、ロジェがタイトルのみを見て分類を行っていたのではなく、ある程度音楽的な内容も理解していたことが示された。こうして、ロジェは多様な出版譜を分かりやすく分類することで、限られた地域だけでなく、広範囲にわたるさまざまな好みの顧客に対応することができたと考えられる。

3. 質疑、反響と感想

本発表は「楽譜出版と商業の役割」というセクションで行われたこともあり、来場者は出版者が音楽作品にどのようにアプローチし、どのように世の中に提供したのか、ということに関心を持っていたように思う。私の発表に対しては、イギリス・バロック音楽の専門家レベッカ・ハリソン氏から「ロジェの分類は音楽様式を区別するものではなく、タイトルのみによる表面的なもので、商売上の戦略だったのではないか」という指摘を頂いた。発表の題目にあるように、本発表では当初ロジェの分類を「様式の判別」と捉えていたが、指摘を受け、楽譜をより多く売るためのアイデアとして捉えた方が、実情に即していることに気が付いた。また、ドイツで手稿譜研究を行うルイ・デルペッシュ氏からは、ステッファーニのソナタに関して、ロジェの出版譜を見るだけでなく、ステッファーニ自身がどのような編成のオーケストラ曲を書いたのか、手稿譜から検討する必要性を指摘して頂いた。全体として、ロジェが「フランス風」と「イタリア風」で作品の呼び名を変えていたことに対する反響が大きかった。バロック音楽研究では、ロジェの名前はさまざまな作曲家の史料で登場するため、その知名度こそ高いが「オランダの海賊出版者」というイメージも根強い。今回の発表では、そのようなイメージを逆手に取って、カタログを活用する商売人ロジェの独創的な一面を紹介することができたように思う。

学会では発表の他にもさまざまなイベントが開催された。カンタベリーと言えば大聖堂の街である。7月15日には学会用に特別にアレンジされた夕べの祈りがあり、すばらしい男声合唱とコンサートを楽しめた。また、17日の朝には総会が開かれ、次の開催地を決めるコンテストが行われた。今年はパリ、クレモナ、フィレンツェが立候補し、それぞれの都市の代表者が街の魅力と学会開催にあたっての利便性を訴えるプレゼンテーションを行った。その後、有権者（参加者）によるディスカッションの時間が設けられ、投票を行い、結果クレモナに決まった。学会の開催地を話し合いと投票で決めるという直接民主制を目の当たりにし、ヨーロッパにいることを強く実感した出来事だった。

今回は私にとって初めての国際学会発表であり、バロック音楽に関してさまざまな国の研究者と英語で議論する貴重な経験となった。名札に“Japan”と書かれているのを見て、ランチタイムに「今度東京でIMSがありますよね、行きますよ！」と声をかけられたのが印象に残っている。日本のバロック音楽研究を盛り上げていけるよう、今後一層励んでいきたい。

最後に、日本音楽学会国際研究発表奨励金を賜ったこと、また住友生命保険相互会社のご支援に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。